

近代短歌に現われた子ども (三十二)



大塚 雅彦

(42) 出征将兵等の歌

満州事変、日中戦争及び太平洋戦争はそれらを総称して十五年戦争と呼ばれる。満州事変が起ったのが昭和六年（一九三二）九月であり、太平洋戦争が終わったのが同二十年（一九四五）であり、その間十五年にわたるからである。そして、満州事変と日中戦争における陸軍の死者は三十数万名であったが、十五年戦争で失われた人命全体は約三一〇万名で、その内訳は、戦死または戦病死した軍人・軍属・準軍属等が二三〇万名、外地で死亡した民間人が約三〇万名、内地の戦災死者約五〇万名という（小学館版・昭和の歴史(7)木坂順一郎『太平洋戦争』昭57・12）。別の本によれば、敗戦の時、日本陸海軍の総兵力は七二〇万に

達し、それ迄の戦死者、除隊者を考慮すると、のべ一千万人が兵士として戦争に参加したが、これは日本人の男子総数の四分の一、ほぼ二世帯に一人強の出征兵士を出していたことになり……有史以来最大の動員数であった。そして直接戦場で失われた兵士の生命は約二〇〇万にのぼり、しかもこのほかに、空襲や原爆の犠牲となり、または沖繩・満州等で戦火の巻きぞえとなった非戦闘員を加えて、合計三〇〇万の人命が失われた。ほぼ五世帯に一人の割合で国民は肉親を失つたという（遠山茂樹・今井清一・藤原彰『昭和史〔新版〕』昭34・8）。いずれにしても莫大なその数に驚かざるを得ない。

出征した将兵たちは数多の手記・日記・記録・書簡・遺稿等を世にのこした。それらの多くのものが戦後刊行され、感動を呼び、今更の如く戦争の惨禍を国民に知らしめるに至ったが、彼等の中には短歌をのこした者も少なくない。彼等は短歌を平常からやや専門的に長くやっていた者も居たろうが、日本人は昔から感懐を歌に托するという習慣もあったから、日頃はあまり短歌に従事しな

かった者でも、例えば戦場という極限状況の中での思いを、短歌というかたちで示した例もまた多い。そこで彼等の短歌作品を収録している文献の中から、当面のテーマである子どもが出征将兵にどううたわれているかを考察し、彼等にとって子どもとは何であったかを考えてみよう。

① 『渡辺直己歌集』

十五年戦争に従軍した将兵の歌集の中で最もすぐれたものの一つは『渡辺直己歌集』であろう。彼は明治四十一年、広島県呉市に生まれ、広島高師卒業後、呉市立高女教諭となった。昭和十二年支那事変勃発と共に応召、中国に転戦し、十四年八月河北省で戦死、陸軍大尉に即日昇進。三十一才であった。墓は呉市にある。

短歌は始め呉アララギ会に参加して作り、のち「アララギ」に入会し、土屋文明に師事した。彼の短歌が事実把握にすぐれ、リアリズムの手法によって対象を的確に描写し、戦闘の非情さや戦闘者の緊迫した心情等を鋭く

表出し得たのは、「アララギ」の写実主義で学んだ面が多かった故といえるだろう。「壕の中に坐せしめて撃ちし朱占匪しゅせんびは哀願もせず眼をあきしまま」「涙拭ひて逆襲し来る敵兵は髪長き広西カンシ学生軍なりき」——こういう作品のもつ迫真力は、われわれの心胆を寒からしめるし、多くの将兵によって十五年戦争中に作られた作品全体を通じて、あまり類がない。彼の師の土屋文明は、渡辺の作品によって事変短歌が先鞭をつけられ、彼の歌がこの面で指導的役割を担った点を指摘している。

彼の伝記としては米田利昭『戦争と歌人——渡辺直己の生涯と芸術』（昭43）がある。『渡辺直己歌集』は戦死翌年の昭和十五年に呉アララギ会から発行されたが、昭和五十八年に石川書房から複製版が刊行されている。

① 既にして堅き決意はありと言へど生徒等の手紙に涙ぐみたり

② 教え児の制服が視野の一角に現れしは昨夜きのぞの幻覚なりき

③ 照準つけしままの姿勢にて息絶えし少年もありき敵陣の中に

直己は出征前に一度結婚したが、間もなく離婚している。従って子はない。彼の歌集に出てくる子どもは女学校で担任した教え児の女生徒たちと、③のように敵の少年兵をうたった珍しい作品とである。彼が呉市立高女教諭として勤めたのは昭和六年末から、応召する十二年夏頃までである。彼は明朗で人あたりもよく、人情があり、洗練された風貌であり、また、文学への情熱をそのまま生徒らにぶつけるような授業であったから、生徒たちですこぶる慕われたという（米田、前掲書）。戦地にあっても屢々教え子からの慰問の手紙が来たらしく、①は「征途につく」一連にあるから比較的応召初期の作品であるが、その後戦場にあっても、エリカの花を送って来た児、慰問袋の中に双葉山夫妻の写真を送って来た児等が、時にうたわれている。②は戦陣に於いてなお、明日をも知れぬ日々匆忙の間にあって、視野の中に教え子の制服の幻覚を見るあたり、教師軍人ならではの作である

う。③は渡辺作品の中で最も有名なものの一つであり、ヒューマンな感情を深く湛えた一首である。涙流しつつ逆襲してくる中国の学生兵に、日本軍の侵略に怒って生命をまともに抵抗してくる彼等への愕きや怖れを感じつつも、一面では彼等を憐まれずに居られない民族同士の対立を超えた人間的な胸熱き想いが③にも活き活きと息づいている。そして十代の子どもを兵として駆り立てる戦争の非情さが、この銃に照準したまま絶命している少年兵の姿に端的に現われている。私はこの③の歌に、第一次世界大戦を描いた映画の名作「西部戦線異状なし」の最後の場面——少年兵が塹壕の中で、眼の前にとまった美しい蝶をつまむべく身を乗り出した瞬間、狙撃されて絶命するあの胸つぶれる如きひと齣を想起せざるを得ないものである。

④ 『戦没学生の遺書にみる15年戦争』

人口に膾炙している『きけわだつみのこえ』昭24東大協同出版部刊、その後、昭34に光文社より新書版刊行、更に

昭57に岩波文庫版刊行)には、多くの遺稿にまじって十三名の戦没学生が短歌を遺している。総計四十四首であるから多くはない。この中で、上官の罪を負うてシンガポールで刑死した京大生木村久夫上等兵の十一首はさすがに哀切を極めるが、他の学生たちの短歌は紋切型で稚拙であり、彼等の文章がすぐれているのに比して、不思議ですらある(日本戦没学生記念会機関誌「きけわだつみのこえ」第3号〈昭35・6〉所収、拙稿「『わだつみのこえ』の歌」参照)。また、子どもを対象とした歌も妹をうたったものが一首あるくらいで、殆どない。それに較べると『戦没学生の遺書にみる15年戦争』(日本戦没学生記念会編、昭38光文社刊、その後『第2集きけわだつみのこえ』と改題)は僅か五名の者が短歌をのこしているだけだが、その中、既述の渡辺直己の他に、井上淳が抜群のすぐれた短歌をとどめている。井上は昭和十六年十二月に立教大学文学部哲学科を卒業、十七年一月に入隊し、十九年七月にマリアナ方面で戦死した。陸軍兵長であった。「思想ばかり高遠になりても食えなくば仕方

あるまじと父はまた言う」というような、昭和初期の世相を背景にしたと思われるユニークな作もあるが、次のような子どもを素材にした口語調の異色作がある。

①べったりと廊下にすわりついて四五人もの欠食児童が絵本をみている

②欠食の子らも湯のみに湯をもらいしゃべりつつた湯をのみており

③火鉢のそばなかなかはなれぬ欠食児に級長はやかましく座につけという

これらは「児童の弁当栄養調査」という題がついている作品群である。編者の傍註によると、「井上氏は予科より本科へ進むあいだ、一時、小学校の代用教員をしていた」とある。つまりこれは、その代用教員（なつかしい言葉だが、正規の資格——師範学校卒——のない、臨時採用の教師で、旧制中等学校卒業生などが多く採用されたようだ。石川啄木は盛岡中学校中退だが、母校浜民小学校の代用教員に採用されて、極めて意欲的な教師活動をしている——洋々社刊「啄木研究」第7号（昭57・1）

所収、拙稿「教師啄木」参照）時代の体験を詠出したものだろう。受持の児童の中に弁当を持って来られない欠食児童たちが何人も居るのを、痛ましい思いで見ているであろう。私は昭和初期に農村の小学校で学んだが、今考えると弁当を持って来ない仲間の児童も居たように思う。それほど農村は貧しかった。「欠食児童」ということはをマスコミも当時よく使った。日本経済史にいう「昭和恐慌」は農業恐慌に最も尖鋭なかたちで現われ、米価は下落して農家経済は深刻な圧迫を蒙り、負債の増大、家計赤字の進行に苦しみ、小作農等の貧農層は特に窮乏が甚しかった（隅谷三喜男編『昭和恐慌』昭49）。また東北地方の凶作による窮迫は昭和四年頃から慢性的に続いていたが、昭和七年七月廿七日、文部省は農漁村の「欠食児童」は廿万人と発表している。昭和九年は特にひどく、冷害と大凶作のため、「欠食児童」や「娘の身売り」や自殺や行き倒れ等が続出したのである（小学館版「昭和の歴史」別巻、原田勝正編『昭和の世相』昭58）。井上の短歌はこのような世相を背景にして読むと、

まさに世相史的歴史的意義があるといえる。空腹に堪えられず廊下に坐りこんで絵本を見たり、飯がないのでせめて湯で空腹を幾らかでも凌ごうとする児童らが①②で捉えられ、ひもじさと寒さに火鉢の傍を離れられぬ彼等と、役目柄、仕方なく「席につけ」と彼等に命じている級長（今のクラス委員に当るうか）とが③で描かれる。そして、それらを見つめている若い代用教員の作者——暖衣飽食の当世では想像もつかぬ世界であるが、こういうすぐれた作品を示した若者をも、戦争は永久に奪ったのである。

④ 『支那事変歌集』

『支那事変歌集』と銘うった本には何種かのものがある。例えば大日本歌人協会編『支那事変歌集』は『戦地篇』と『銃後篇』の二冊があり、『戦地篇』は昭13・12改造社刊で戦地詠二七〇四首（五〇〇名）を収め、『銃後篇』は昭16・10大日本歌人協会刊で歌壇の雑誌百種に近いものの中から約一五〇〇首（二〇〇〇余名）を抄出

している。また読売新聞社編『支那事変歌集』（昭13三省堂刊）や、アララギ年刊歌集別篇としての『支那事変歌集』（昭15）もある。ここでは読売新聞社版のもの（同社が懸賞募集した作品の中から佐佐木信綱・斎藤茂吉の両歌人が選をしたもので、一冊の中が「現地篇」と「銃後篇」に分れている）を一見してみよう。「現地篇」では子の写真にそへし手紙の片仮名をまた出して読む書の塹壕に（北支派遣軍 木暮武夫）

其の他二、三くらいで子どもの歌は少なく、
銭投げの遊戯してゐる支那街の子等の群にも吾は馴れ
にき（天津 鮎沢周太）

小孩の片言なれどやまと言葉いふをし聞けば嬉しくも
あるか（上海派遣軍 金子賢三）

と、中国の子ども達をうたったのがやや珍らしいくらいであるが、『銃後篇』には戦争色が深まってゆく時代の子どものさまさまの相を描出しているのが注目される。

①父にあはせて出征の歌口真似す吾子は手をふり足踏
みならし
小柴千代子

② 征く父に甘えだかるる幼子が片言ながら軍歌うたへる

① 出征の家の手助けに生徒らは昆布干場の砂利均し居り

③ この家も出征なりと児童等の言ひかはしつづつ行くも身に沁む

⑫ 献金せんとはげましあひて村の子等牧草の種日ざかりにつむ

④ 戦線に兵馬苦闘の話をは身ゆるぎもせて児童等聴き入る

⑬ 負へる子をなだめつつ出す求職票に夫応召の為と書かれたり

⑤ 子供等が道にゑがきし飛行機は単葉にして爆弾積みたり

⑭ 鬚をやし馬に乗りたる夫の写真部隊長の如しと子らは喜ぶ

⑥ 穂波わけて突撃したる子らあまた夕日を浴びて叱られ居るも

⑮ 送りたる子等の写真を身につけつつ徐州に向ふとのたより届きし

⑦ 五月雨の溜りし水に子等寄りて敵前渡河の真似ごとをする

⑯ 子がかきし空中戦のクレヨン畫慰問袋に入れて送りぬ

⑧ 中隊の畫餉する前に童等が寄り来て罐の穀持ちてゆく

⑰ 吾子起ちてけふは一步を歩みぬとまづ戦線の夫に便りす

⑨ 金属類一品献納に壊れたる玩具自動車を持ちて来ぬ

⑱ 鮮童の手に手に振れる日のみ旗ますらをの心つよくうつらし

⑩ すこしづつためし小遣献金すと吾子わが前に持ちて来にけり

⑲ 陽焼せし顔すこやかに帰り来し夫のそばより離れず

三上 一郎

高橋 十成

城知 恵子

越田 健

小川伊七造

荻田きみ子

平沢 秀政

飯田 しん

郡司波津子

益田 初子

中村さか恵

高島 喜作

藤野 波男

西田 喜美

加藤 信夫

樽井寿々代

飯島 操

椿 千代子

⑳行賞の発表ありし新聞を子等とささげぬ亡き父の前に
渡辺 仁子

⑳あはれ迪子軍歌うたへば天にしてみ霊も聴くか其の
うたふ声を
石黒 清子

①②は出征する父と子で、幼子であるが、父の出征に軍歌を唱う孩児は、やや長ずると③④のような「軍国の子」になって行った。⑤⑥⑦は当時の子どもの達の遊びを示しているが、遊びもまた戦時色であった。⑥にはフェールがあるが、こうした遊びは戦時に限らないし、まことにラスキンが言ったように、幼時から男児は男児らしい遊びをし、女児は女児らしい遊びをおのずからするものかもしれない。⑧から⑫までは子どもの奉仕活動だ。こんなサービスや国策への協力を「お国のため」と、戦時中の子ども達すらさせられていた。但し⑧は子ども達が自然に（自発的に？）やった行動かもしれないが、それすら時代を思わせる。⑬から⑰までは、戦後の妻と子のすがたが現われている。⑱がのこされている妻子の生活のきびしさを反映していて、個性ある歌である。⑳は

作者の住所が「安東」とあるから、当時満州に居た邦人の作だ。出征、通過する日本兵を朝鮮の童たちが日章旗を振って迎え、送ったのを描いた歌であろうか？日本の軍国主義の中に朝鮮の児童たちも巻き込まれていた事実を、日本人は忘れてはならないであろう。⑲は帰還兵と子どもの歌、⑳㉑は恐らく戦争未亡人の作品であろう。戦没した亡夫の霊前に論功行賞の発表を載せた新聞を供える妻と子。軍国主義者たちは「靖国の妻」などと軍国美談めいた操作をしてこうした遺族をクロースアップし、国民の戦意昂揚をはかった。しかし妻の本当のねがいは、明治のむかし与謝野晶子がうたったように「君死にたまうことなかれ」であった筈である。頑是ない幼児の迪子さんが軍歌を唱っても、戦没した在夫の亡父の幽魂は、それを喜んだかどうか。むしろ霊に心あらば断腸の思いで聴いたであろう。戦争が子ども達にとってもどんなに酷烈無慚なものであるかを今も伝える作品群である。

（お茶の水女子大学）